

2018年9月23日(日) 近畿旧友会ハイキングクラブ「燦歩会」例会 (第473回)

## 六甲の自然を取り込んだ広大な森林植物園を楽しむ(兵庫)

「生命の危険」という厳しい表現がしばしば見られた今夏の暑さ。さすがの燦歩会も、7月の例会「京都府福知山」は前日に中止を決定。来年3月にリベンジする事になりました。いま考えると、まさにきわどい決断だったといえるでしょう。

\* \* \*

暑さもほぼ去って、丁度秋雨前線の切れ目の晴天の日に、六甲山に秋を訪ねました。目的地は神戸市立森林植物園、総面積142ヘクタールという広大な植物園です。(東西・南北共に、一番広い所が1.5キロ程あります)

参加者22名(男性12、女性10)は二手に分かれて標高450mの植物園を目指しました。一組は、六甲山の下を北に抜けた谷上駅(北神急行北神線)から、標高差200mの山田道をゆっくり上ります。(山田という地名は、後ほどまた出て来ます)もう一組は、北鈴蘭台駅(神戸電鉄有馬線)から、植物園へのシャトルバスを利用します。

\* \* \*

いつもの燦歩会らしくからぬハードな光景ですね。17名(男性8 女性9)は午前10時に谷上駅をスタートして、谷川に沿ってさかのぼり、森林植物園を目指しました。途中で2カ所飛び石伝いに谷川を渡る所があります。先日の台風で山道が荒れていないか心配になり、事前に神戸市森林整備事務所に確認して、大丈夫という事で登り始めたのです。ところがなんと飛び石が流れに沈んでいます。秋雨前線のおかげで川が増水して



いたのです。簡単には渡れそうにありません。靴も靴下も脱いで、砂地の川底に足を踏ん張り、次から次へと手を差し出しながら、ようやく全員が渡り終えました。

(あの渡河が一番楽しかったとは帰路の電車内での皆さんの声でした。)

ゆっくり歩いて1時間の筈でしたが、1時間半ほどかかり、昼前に森林植物園に入りました。

(小林一馬 記)

メタセコイアの並木は、数日来の雨にも洗われて、まことに爽やかな緑のトンネルです。園内には1200種類の植物が植えられ、その内500種類は海外の植物だそうです。

シャトルバスの組と合流して、昼食です。

午後一番に離脱する会員もいる為、森林展示館のジャイアントセコイアの切株の前で全員写真です。樹齢はおよそ2000年だそうです。





午後はボランティアガイドさんに案内して頂いて園内の散策です。  
 解説は微に入り細に渡ります。巨木を見上げ、足元の小さな花に見入ります。



7月の西日本豪雨、8月の台風20号、9月の台風21号と立て続けに西日本を襲った災害は、この植物園にも大きな爪痕を残しました。園内で300本の樹木が被害を受けたという事です。道の傍に根こそぎ倒れた大木がありましたが、自然の猛威を知って貰うために残している意味もあるのだそうです。

園内には、いま秋の草花が精一杯の輝きを見せています。  
 いずれも1cmあるかないかの、小さな花ですが、今回は一際大きく、主役を張って貰いましょう。



ミズヒキ



キンミズヒキ



萩の花ももう終わり



オミナエシ



ゲンノショウコ



ススキの足元にはナンバンギセル



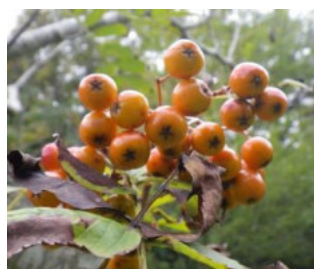
ワレモコウ



そして、一方には実りを急ぐ姿もありました。間もなく、鳥たちがこの実をついばむ事でしょう。



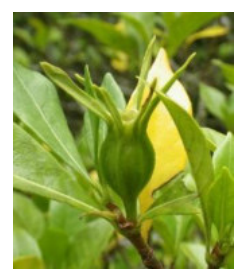
サンザシ



ナナカマド



アオツヅラフジ



クチナシ

谷上から登って来た「山田道」は園内を通り抜けて神戸の町へ向かいます。山の産物を神戸へ、海の産物を山間へ、山田道は重要な物資運搬の路、生活道路だったのでしょう。



園内の至る所、地面に掘られた跡がありました。

始めは大雨のせいかと思っていたのですが、どうやらイノシシの仕業のようです。



ガイドさんの案内で、こんな物を見る事が出来ました。差渡し1mほどの「イノシシの泥浴び場」です。イノシシはここに入って転げまわり泥を全身に付けます。その体を周辺の草や樹木にこすり付け、体についた寄生虫などを取り除くのだそうで、周囲の草むらに泥が飛び散っていました。

「泥浴び場」は園内で数カ所確認されているそうです。

自然の豊かさ、奥深さ、猛々しさを感じ、森林浴をたっぷり楽しんで、15時前のシャトルバスで全員が北鈴蘭台駅に向かい、無事解散しました。

\* \* \*

相変わらずの蛇足で失礼します。

## 1 紀元2600年事業のこと

森林植物園の造成は、昭和15（1940）年に始まったと聞いた時には、驚きました。中国での戦線が泥沼化し、間もなく世界を相手にした戦いに突き進んでゆく日本。物資が欠乏し、国を挙げて儉約が叫ばれていた時代に、こんな大事業を始めたとは……。でも、それが紀元2600年を記念する事業だとわかって、納得がゆきました。

昭和15年は神武天皇即位から2600年にあたるという事で、全国で盛大な祝典、記念の事業が催されました。即位・建国の地、奈良の橿原神宮では、その前年に修学旅行生を含め全国からの7,200団体、121万人が勤労奉仕して、社殿の修築、神武天皇陵の拡張整備、鉄道駅舎や線路の移設などが行われ、またカシの木など7万6,000本余りが植えられました。東京では、11月10日に、宮城前広場で内閣主催の「紀元二千六百年式典」が盛大に開催され、祝賀ムードは最高潮。記念切手が発行され、展覧会、体育大会など様々な記念行事が、国内だけでなく、外地でも催されたのです。

そしてまた、皇室に関係する神社、明治神宮・橿原神宮・伊勢神宮などへの一大参拝ブームが起きたのです。当時は資源不足の統制経済、軍事輸送最優先で、観光旅行など「以ての外」でしたが、参拝は例外とされ、むしろ割引乗車券が出るなど奨励されたのです。国民は長く旅行を遠慮していたこともあって、大手を振ってこれらの神社へ出かける事が出来たのです。この年の橿原神宮参拝者は実に971万人、伊勢神宮では798万人を数えたという事です。幕末の「ええじゃないか・おかげ参り」に匹敵するような参拝フィーバーだったのかも知れませんね。ただそれは一時の事、すぐさま「祝い終わった、さあ働こう！」の旗印が掲げられ、その後の日本の姿は、歴史が示している通りです。

蛇足が脱線してしまいました。森林植物園の造成に戻ります。この紀元2600年を前に、記念事業をするようにという政府からの指示に対して、神戸市が提案したのが、国土の保全、水源の涵養という大命題に、自然科学の普及、観光地の造成も兼ねる森林植物園の構想でした。この提案は「素晴らしい」とお墨付きが出て、即認められ、10年計画100万円の予算がついたという事です。昭和15年2月に起工式が行われ、世界中の針葉樹を集める事業が進められます。戦争の激しい昭和20年でも200本の植樹が行われ、戦後も整備が続いて、1951（昭和26）年に無料開放されます。戦いの最中や窮乏生活の戦後にも営々と樹を植え続けた人々の努力が、今日の景観を形作っているのですね。

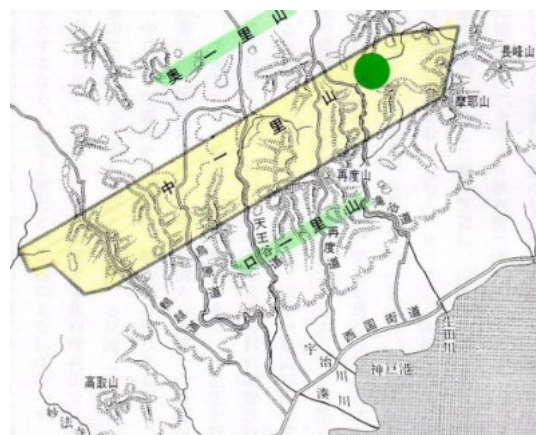
## 2 中一里山（なかいちりやま）争論のこと

植物園の中に「争論の松」というものがあると聞いて、尋ねてみました。散策路から林の中を登り尾根筋に出た所、松はすでになくなっていましたが、跡を示す案内板がありました。



古くから六甲山は入会（いりあい）の山でした。神戸側の50数箇村と北側の山田村が互いに入り込んで、下草を刈って肥料にし、薪を拾い、木の実や山野草を採取することが認められていました。そこには暗黙の節度があったのですが、往々にして、我が物と主張する向きが現れます。それは、どこの入会にもしばしば見られた事ですが、この地の「中一里山」の争論は、何しろ長く激しかったようです。この山地は、神戸の側から「ロ一里」「中一里」「奥一里」と称され、主に「中一里」の帰属を巡って、争いが起きていたのです。

（右の図は「新修神戸市史の概略図に着色。  
緑丸が森林植物公園の辺りです）



古くはなんと1604（慶長9）年11月に、重傷者を出すほどの争いになります。徳川幕府が生まれたばかりの頃です。当時、摂河泉（摂津・河内・和泉）の三国奉行だった片桐且元が「中一里山」を山田村のものとするという裁定を下していますが、その後も争いは収まらず、首謀者がさらし首になるような事件も起きています。

争いが決着したのは、徳川300年の世が終わった後、なんと1877（明治9）年のこと。「中一里山」は神戸側のものになったのです。

松は、その境界を示すために植えられたのでしょうか？

切株から、樹齢150年程と推定されていました。

今も、案内板の足元には「山田」、そしてすぐ近くには「神戸」の標柱が立っていました。

\* \* \*

## ご案内

旧友会員の方、職員の方、入会大歓迎です。入念な下見を行い、中途離脱も可能なルートを設定して、**毎月第4日曜日**に歩いています。メンバーはおよそ50名、その日の都合と体調に合わせて自由参加です。（事前に予約が必要な場合もあります）

### 今後の予定

- 10月 京都トレイル第2回 伏見稲荷から蹴上へ（京都）
- 11月25・6日 若狭・三方五湖と鯖街道を歩く（1泊2日のツアー）
- 12月16日 納会（大阪）
- 1月 エキゾチック！世界宗教寺院めぐり（兵庫）
- 2月 日野ひな祭り紀行と町並み散策（滋賀）
- 3月 光秀ゆかりの福知山城と御霊神社を訪ね、由良川で治水の歴史を学ぶ（青春18切符を利用 京都）

参加ご希望の方は、山村恵一さんにご連絡下さい。（電話 0743-20-4159）

一緒に気軽に楽しく歩きましょう。

（生島 おじま 幸弥 記）